

「古代地方寺院としての夏見廃寺」

— 大伯皇女 夏見廃寺 その三 —

遠田千代吉

一 はじめに

この稿は、ここに至り夏見廃寺の説明に入る。七世紀第四半期後半の創建と伝えられる夏見廃寺は、どのような寺であつたのであろうか。

二 地方寺院としての寺域

夏見廃寺は、名張市内の男山の南に広がる斜面に在る。この立地上の制約と、地方寺院であることから、夏見廃寺の規模・寺域は中央寺院に比べ小規模となる。古代寺院の寺域の確定には制約が伴うが、夏見廃寺を俯瞰し理解するため、発掘成果等を踏まえ、他の寺院との比較を行う。

(一) 中央寺院の寺域

いずれも発掘調査事例から、次の通り推定されている。

大和 飛鳥寺 二町四方 東西約二一八m、南北約二一八m (一町・約一〇九m)

大和 川原寺 二町四方とされており、飛鳥寺とほぼ同規模寺域

大和 山田寺 東西約一一八m、南北約一八六m

(二) 地方寺院の寺域事例

発掘調査から寺域のわかっている事例として、次の事例があげられる。

安芸 横見廃寺 東西約一〇〇m 南北七〇m

阿波 立光寺跡 東西九四m 南北 一二〇m

備中 賞田廃寺 東西一〇九m 南北 一〇九m ほぼ一町四方

ここからわかることは、地方寺院の寺域・規模は、中央寺院に比べ、四分の一程の小規模な寺域であった。〔註 一〕

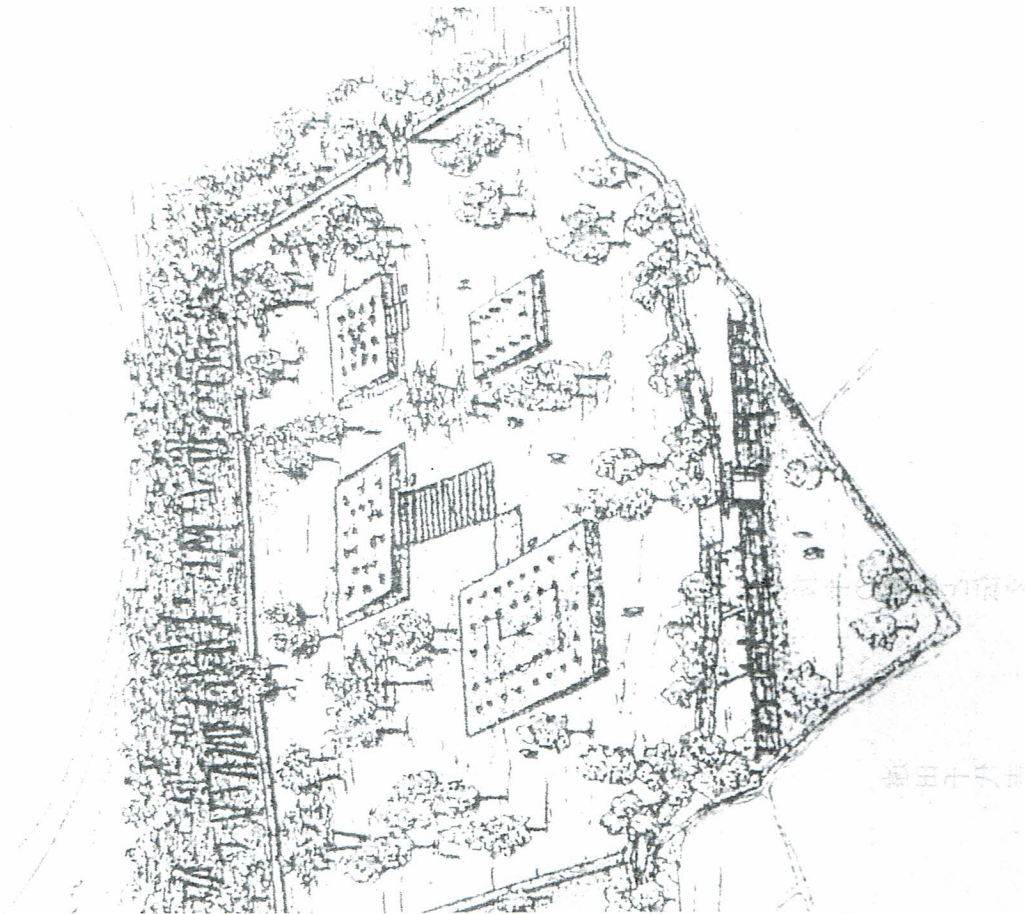
(三) 夏見廃寺の寺域

夏見廃寺は、発掘調査の結果から寺域はほぼ確定している。

名張 夏見廃寺 東西約八四m 南北約七六m 矩形の寺域〔註 一二〕

ここにみるように、夏見廃寺は他の地方寺院とほぼ同規模ながら、「やや小ぶりの寺域規模」といえる。

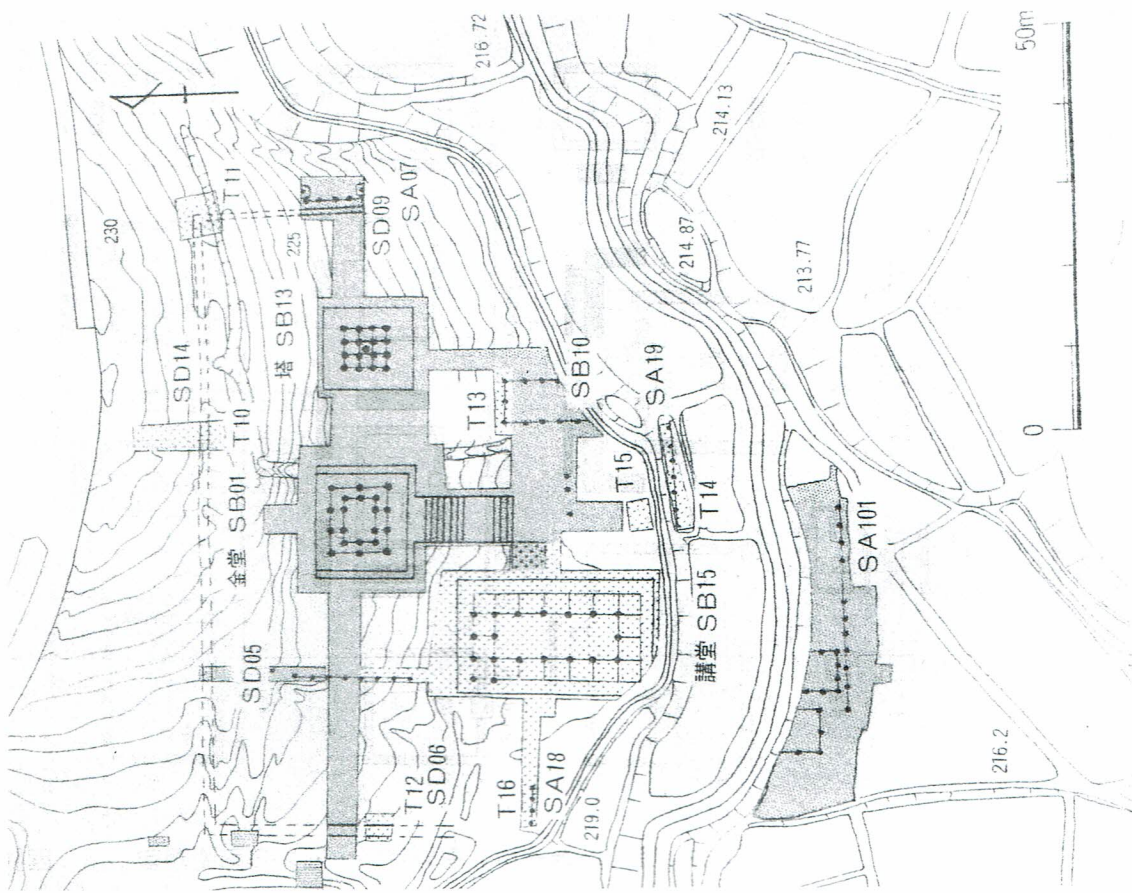
〔図 一 夏見廃寺イメージ図・発掘調査報告書〕



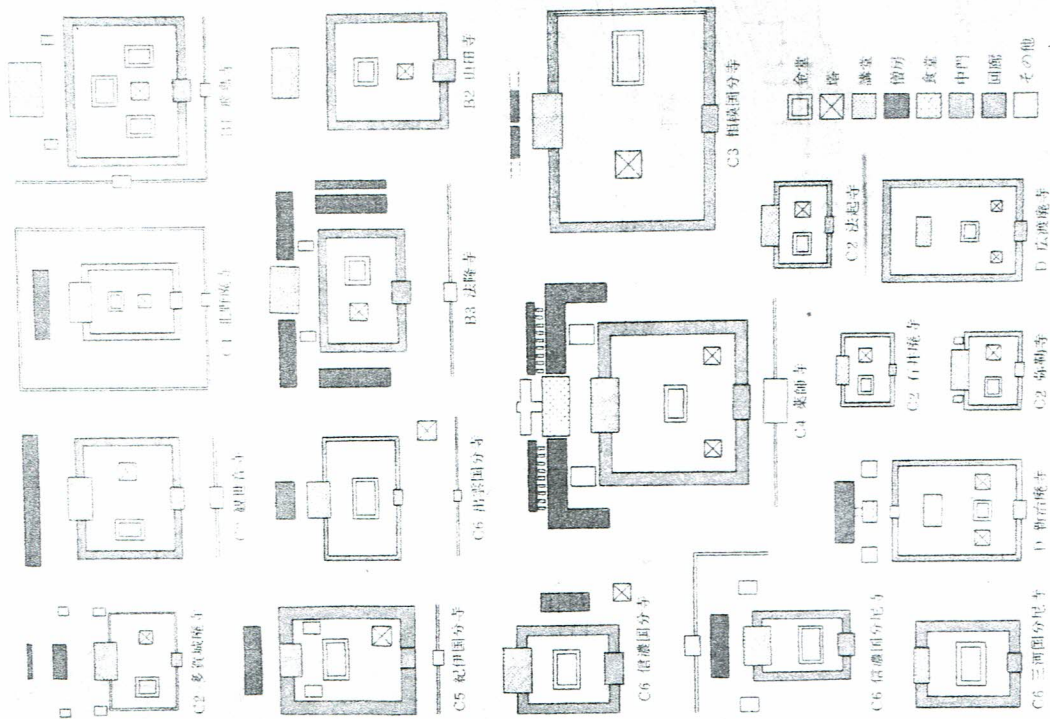
三 伽藍の配置

伽藍とは寺院、あるいはその建物の総称であり、七堂伽藍とも称される。七堂伽藍は、塔・金堂・講堂・鐘楼・経蔵・僧房・食堂で構成される。発掘調査から分かったことは、夏見廃寺は七堂伽藍のうち、塔・金堂・講堂・僧房の構成であつた。七世紀後半の伽藍配置は、塔・金堂が横に並列する法隆寺式ないしは法起寺式の伽藍配置が多かつたといわれている。「註 三」夏見廃寺では塔が東、西に金堂が並ぶ塔・金堂並置の法起寺式の伽藍配置が採られている。ただ法起寺式伽藍配置では講堂が並置される塔・金堂の後方に置かれるが、夏見廃寺は南面する傾斜地に立地し、後方が丘陵となることから、講堂は金堂の南下に置かれている。

〔図 二 夏見廃寺伽藍配置・発掘調査報告書〕



〔図三 伽藍配置模式図・岩波講座『日本考古学四 集落と祭祀』〕



四 金堂

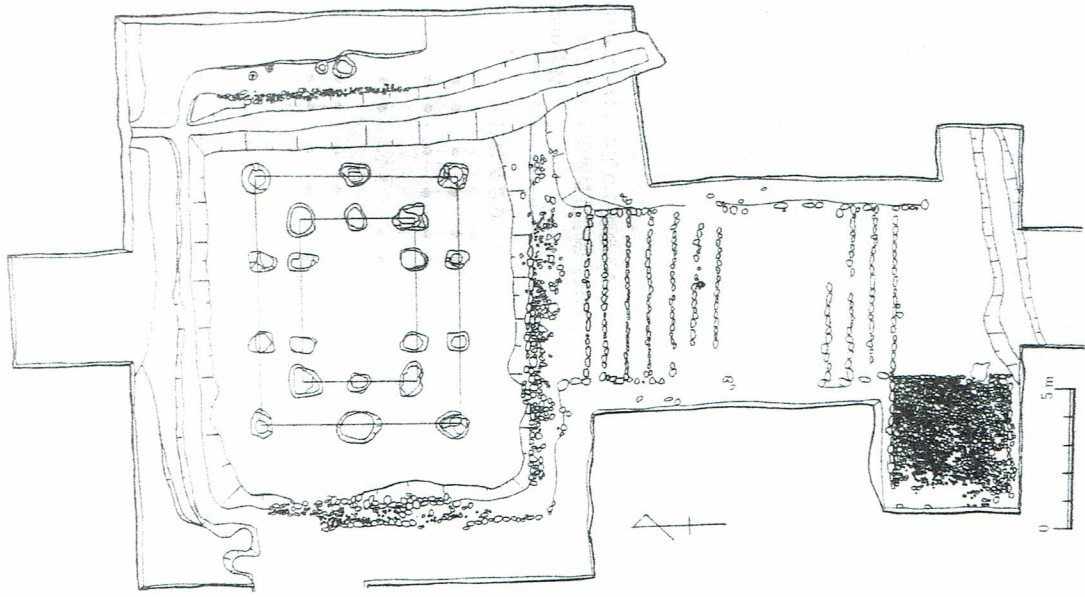
金堂の規模、建築手法は寺格や発願者の身分の違いが表れる。金堂は、建築を通して寺にかかわる階層・人を映し出す鏡ともいわれる。〔註 四〕この意味から夏見廃寺の発掘により浮かび上がる金堂の姿は、夏見廃寺にかかわる人々を今に伝えてくるのである。

(一) 規模

金堂の基壇は傾斜地のため、斜面上部を削り、下方へ積み上げ形成した基壇となっている。基壇の周囲は、川原石の乱石積で支えている。基壇上には花崗片麻岩の礎石一九個と抜取穴一か所が確認でき、金堂の構造は、二十個の礎石の上に立つ構造であったと推定できる。礎石配列で建物規模を計ると、建物平面は桁行五・七 m (三間)、梁行四 m (二間)の身舎に桁行八・七 m (三間)、梁行六・七 m (二間)の廂が四面につく南面する建物であった。

比較的小規模な金堂建物であったといえる。

〔図 四 夏見廃寺金堂遺構平面図 発掘調査報告書〕



夏見廃寺金堂遺構平面図

〔図 五 夏見廃寺金堂跡全景 史跡夏見廃寺パンフレット(後の図 九 塔・講堂基壇同じ)〕



(二) 特異な金堂建物

礎石の配列からすると、夏見廃寺の金堂建物は、身舎、廂とも正面柱間三間、奥行柱間二間の特異な構造(礎石二十個)であった。一般的な身舎の三間、二間の建物は、廂が五間、四間となり礎石は二八個となる。(図六参照)夏見廃寺の金堂の柱配置は、図の事例・山田寺金堂と同じで、放射状に近く、幾分簡便な方式となっている。また、身舎の正面両端は柱の間隔(柱間)が極端に狭くなる工夫をしている。この方式は、建築方式からは特異な方式とされ、国内寺院でも奈良県山田寺金堂と滋賀県穴太廃寺再建金堂にのみ知られる特異な構造である。それでは、ここに登場する二寺の共通項は何なのか、探ってみよう。

〔図六 金堂の柱配置と上部構造の比較・箱崎和久『奇偉壯麗の白鳳寺院 山田寺』〕

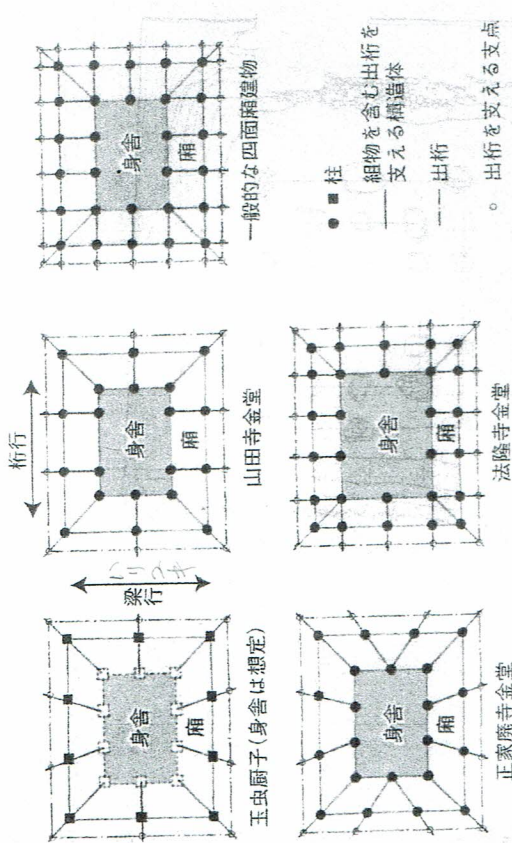


図16 ● 金堂の柱配置と上部構造の比較
 特異な平面をもつ山田寺の金堂の上部構造想定図。なぜこのように柱配置をとらなければならなかったかが課題である。

(三) 山田寺の金堂

山田寺は飛鳥から桜井に向かう安倍山田道に接し建てられた。蘇我倉山田石川麻呂の創建で、寺院建築の経緯は『上宮聖徳法王帝説』の裏書文書により判明している。舒明天皇一三年(六四二)に建築が始まり、大化五年(六四九)の「石川麻呂の変」により中断したが、以後石川麻呂の係累に連なる天智天皇妃姪娘、さらには持統天皇の尽力により、天武天皇一四年(六八五)の丈六仏開眼により完成している。なんと建築着手から完成に四五年を要した。ただ、金堂は皇極天皇二年(六四三)、石川麻呂の存命中に完成している。石川麻呂は大化五年の「石川麻呂の変」に際し、謀反の疑いの潔白を晴らすべく、この完成して間のない金堂の前で、自決した。山田寺の金堂の構造は、残された礎石並びに礎石跡から判明している。桁行三間、梁行二間の身舎に、柱間の広い桁行三間、梁行二間の廂がつく、特異な柱配置の建物であった。(図 六参照)蘇我倉山田石川麻呂が願主となり始められた寺院建築は、「蘇我氏と渡来系の人々とのつながり」を考えれば、山田寺の造営に渡来系の技術者が参画した可能性は高い。つまり山田寺の金堂建築に、渡来系の技術工法が利用され、それが桁行三間、梁行二間の特異構造となったと推定されるのである。

(四) 穴太廃寺の再建金堂

穴太廃寺は滋賀県大津市にある。湖西線辛崎駅近くであるが、発掘調査の後は埋め戻され、現在遺構は見られず、表示看板から推定するのみである。発掘調査の結果、この穴太廃寺は大津京への遷都に伴い、少々複雑な動きを示している。七世紀前半に伽藍が先ず創建され、七世紀後半に再建されているのである。創建伽藍は、推古朝に隋国に派遣された

惠隱(志賀漢人の出自)が舒明天皇二十一年(六三九)の帰国以降に、信仰する願主が浄土信仰に基づき、伽藍を東向きに建てた推定されている。「註 五」その後、天智朝の大津京への遷都の際、穴太廃寺は都市計画に沿って建て替えられた。これが再建伽藍である。再建伽藍は中軸線をほぼ真北に置き、大津京遺構群と一致している。この再建伽藍の金堂の礎石は大半が抜き取られ、残存していないが礎石跡から、身舎、廂とも桁行三間、梁行二間の特異な形式の金堂建物であることが判明している。穴太廃寺の造営氏族については隣接する穴太遺跡で見つかった土壁造り建物、オンドルなどから渡来系氏族と推定され、穴太の地名から、在地の豪族穴太村主氏とされている。「註 六」穴太廃寺は穴太村主氏の氏寺と考えられている。ここでも桁行三間、梁行二間の特異な金堂建築が渡来系氏族につながっているのである。

(五)三間、二間の特異な金堂をくくる共通項

金堂が桁行三間、梁行二間の特異な構造をとっている共通項は、ここに見たように、いずれも「渡来系の人々」がかかわり、採用している建築工法であることである。夏見廃寺は、この三間、二間の特異な金堂建築となっている。ここで思い起こすのは、夏身氏は渡来系氏族であることである。このことから夏見廃寺は、夏身氏の氏寺として創建された可能性が高い。

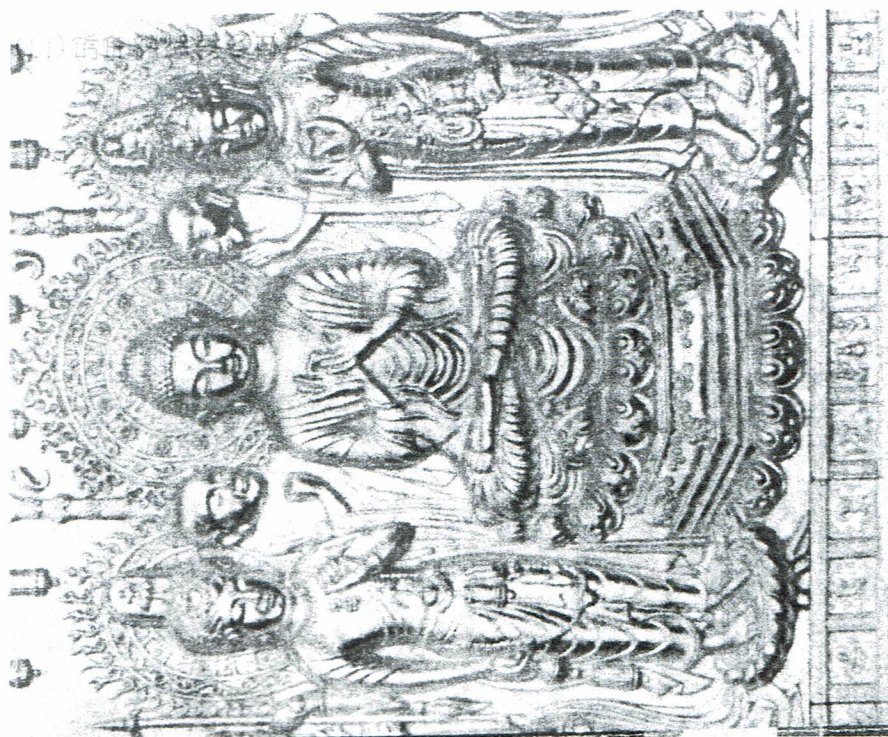
五 博仏

(一)金堂壁面を飾る博仏

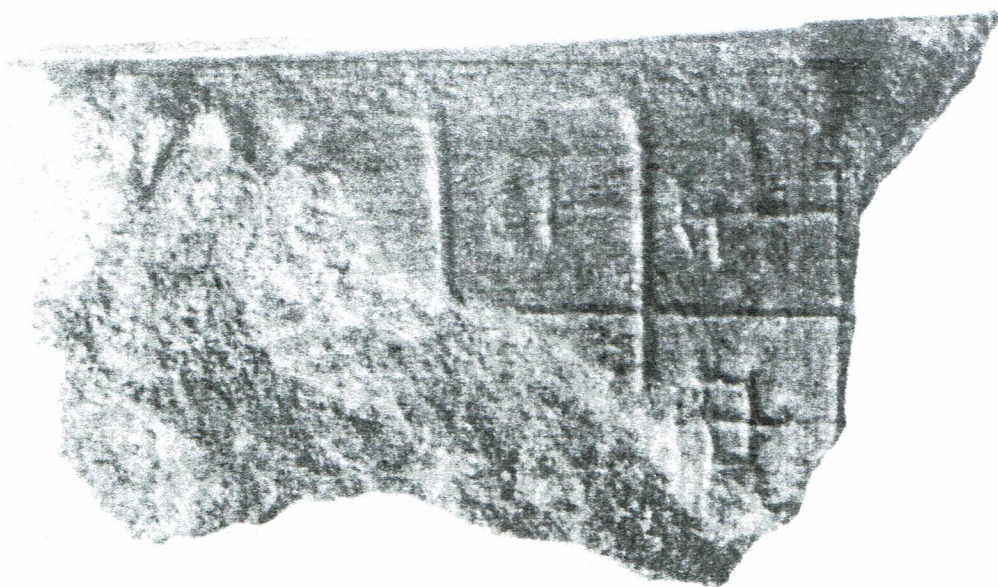
博仏は、仏像を浮き彫りにしたタイル状の焼き物で、金箔等も貼られ、寺院伽藍の壁面を飾る。夏見廃寺の発掘では、金堂跡から大量の博仏破片が検出したことから、金堂壁面

を、この博仏がきらびやかに飾っていたものと思われる。なお、この博仏破片は塔跡からは出土していないことから、塔壁面にはなかった。破片から推定される博仏の種類は、大形博仏、方形三尊博仏、独尊博仏、連座博仏の四種類である。また、夏見廃寺出土の大形博仏と同形の博仏は、法隆寺蔵品、唐招提寺蔵品、藤井有隣館蔵品、藤原京出土品、興福寺出土品などが知られており、夏見廃寺の中央とのつながりを想起させるものとなっている。〔註七〕

〔図七 博仏事例・史跡夏見廃寺パンフレット〕



大形三尊博仏（部分）



紀年銘博仏(表)

(二) 紀年銘記載の博仏

出土した博仏断片の中に、干支年銘を浮き彫りにした須弥壇博仏の断片が確認された。浮彫文字は「甲午年□□中」と読むことができ、金堂創建の時期特定の重要な手がかりとなった。甲午年は、西暦六九四年にあたり、この年に博仏が造られ、建築に利用されたと推定されている。なお、この「甲午年□□中」の□□に、どんな文字が入るか、解けない課題であったが、最近の考古学上の画期的な発掘成果から手がかりが得られた。熊本市の横穴墓跡から、「甲子年五月中」（六〇四年）の銘文の入った鉄刀が出土したのである。また、これに類する事例として既に、兵庫県養父市の円墳から、「戊辰年五月中」（六〇八年）の銘文入りの鉄刀が出土していた。これらの鉄刀の銘文事例から、夏見廃寺博仏銘文の□□には、博仏の造られた月を示す「数・月」が入っていたことが事実となった。〔註 八〕

平成四年（一九九二）二月中日新聞に、私にとり耳寄りな報道がなされていました。樞原考古学研究所が発掘調査を行っている奈良県北葛城郡当麻町染野の石光寺から夏見廃寺の埴仏と同じ型でつくられた埴仏が出土したとの報道であります。同一の型から作られたということは、石光寺と夏見廃寺の間に、特別なつながりがあることを暗示しています。石光寺は大津皇子が葬られたと思われる鳥谷口古墳に近く、私自身も石光寺は大津皇子の菩提を弔う寺ではないかと直感し、ずっと思い続けてきた寺であります。大伯皇女のかかわりのある夏見廃寺と、同皇女の願いで造られたと思われる鳥谷口古墳近くの石光寺との間の、埴仏を通した不思議なつながりに奇縁を感じざるを得ません。石光寺の発掘を担当された樞原考古学研究所の河上邦彦総括研究員（当時）は、次のようなコメントを残しています。

「同じ埴仏が二種類もあるということは、石光寺が大伯皇女ゆかりの人の寺であることを暗示している。大津皇子の菩提堂と考えていいのではないかと思う」〔註 九〕

六 他の伽藍施設と出土遺物

（一）塔

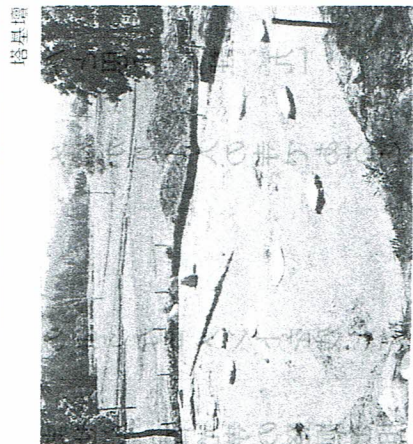
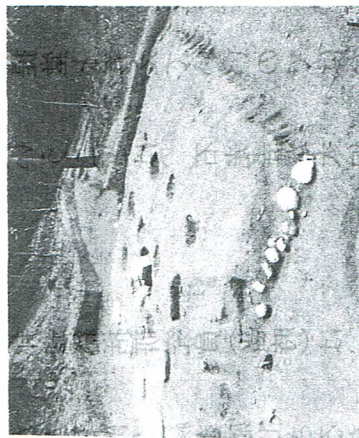
金堂の東に位置して塔が置かれていた。発掘前は南面する斜面上に、周囲よりやや高くなつた土壇が認められ、土壇の中央に心礎石の断片が露出していた。発掘の結果、心礎、六基の礎石、一一か所の礎石抜き取り穴を検出した。現存する心礎は、全体の三分の二の断片である。礎石から推定できる塔は、平面が三間×三間であり、一辺が約五・三mの方形であつた。塔が何層であつたかは、現状判明していない。

(二) 講堂

金堂の西南部の、斜面を切り込んだ一段低い平坦地に講堂は置かれていた。発掘により礎石一四個、東側の基壇が確認され、復元が可能となった。講堂建物は東向きに建てられていた。建物規模を復元すると、梁行二間、桁行五間の身舎に、四間×七間の廂の付く南北棟の建物となる。講堂基壇の規模は、東西一五・四m、南北二四mのとなり、この寺域のなかでは、最も大きな建物であった。

この講堂須弥壇の前方部

床面から、螺髪、衣文、足の親指、小指などの塑像断片が出土している。この中で、螺髪断片は比較的良好な形をとどめていて、その形



状から螺髪としては大きく、丈六仏のものと推定されている。この講堂のなかでの「祈りの場面」が想像されるのである。

(三) 僧堂

塔の南側斜面下で南北棟の建物跡が検出されている。現状では桁行四間が確認できたが、梁行は不明である。僧堂と推定されている。

(四) 塀、築地

夏見廃寺の堂塔を取り囲む外郭区画塀は、二種類あった。北辺と東西両辺は築地塀で、南側は掘立柱塀であった。南側に南門が設けられたと思われるが、現状門跡の遺構は判明

していない

なお、外郭区画塀の発掘から分かることは、区画塀の設置が二度にわたって行われており、伽藍の中心線の移動があつた。後にふれるように、夏見廃寺の建立は、発願から完成まで長期間を要し、途中で中心線の考え方の転換がなされたのである。当初の金堂建築時に塔の設置場所を含めた構想が練られ、中心線は金堂と塔の中間に置かれた。のち塔の建築時に金堂に中心線を置く考え方に転換したと思われる。往時伽藍の中心線の考え方は、並列する金堂・塔の中心から、金堂中心に転換され、夏見廃寺においても、これに沿った転換がなされている。発掘結果からも、この状況を証する外郭区画遺構が検出されているのである。

(五)瓦

瓦は考古学上、関連する遺構の時代判定に最も有効な遺物といえる。夏見廃寺の発掘調査においても大量の瓦類の出土があり、第一次、二次発掘調査で、土のう袋で約一、三〇〇袋の多きにわたった。軒丸瓦・軒平瓦の種別区分から、出土瓦は、白鳳期・天平期・平安前期に区分される。このことは伽藍建築が、この三期にわたることとなるが、その詳細は、この後に言及する。

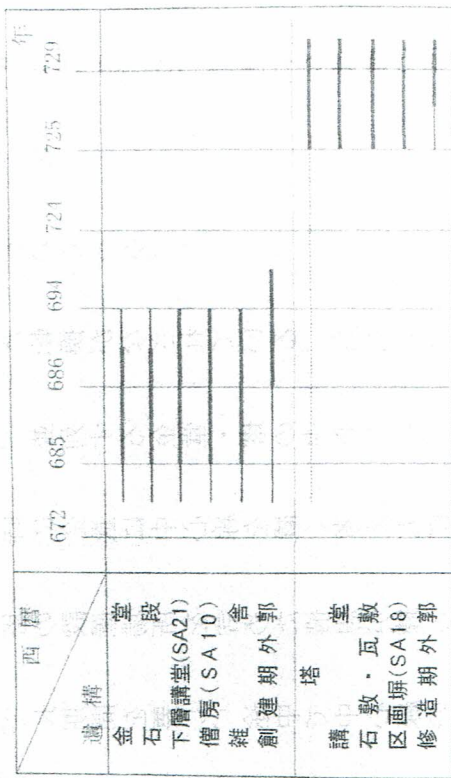
(六)土器

土器類の出土は、細片のものが多く出土量も少ない。ただ、出土土器の中で最古の形式のものとして須恵器の杯蓋で返りの付く形式のものが含まれていた。この有返蓋は七世紀の第四半期に位置づけられることから、寺が七世紀末頃から存在していたことを証する有力な遺物である。〔註 十〕

七 夏見廃寺の造営時期

ここでは夏見廃寺の造営された時期は何時なのか、この点に焦点を当てて考えたい。これを考えるとき、現状最も参考とすべき論文は、夏見廃寺研究会・山田猛氏(三重県埋蔵文化センター勤務・当時)の『夏見廃寺の研究』である。同氏は名張市教育委員会が実施し、出土した遺物である大量の瓦類を、建物毎に詳細に区分、考古学的に時代判定する手法により、建物の造営時期を特定している。同氏は、各遺構の造営期間を「図 十」のように推定し、大きくは三つの時期に造営されたと考えている。以下、その考え方を概観する。

「図 十 各遺構の推定造営期間・夏見廃寺の研究」



第6表 各遺構の推定造営期間 (点線は計測期間)

(一) 創建(白鳳)期

先ず、この時期に金堂が先んじて建立された。同時に簡便な講堂(後に建て替え)、僧堂

も並置されたと思われる。ただ、寺域の中で塔を含めた伽藍配置は、現状みる遺構の配置で、当初から構想されていた。何らかの理由で、塔の造営、全体の同時着手は先延ばしされているのである。従って寺の創建は、この金堂の建立をもって始まり、「甲午年」の紀年銘磚仏、出土の軒瓦類、土器等の実年代観、天武朝の造寺奨励の詔の発令等から、次のように判定している。

「夏見廃寺の創建事業の開始時期は、六八〇年代頃、わけでも六八五年直後の可能性が高いと推定される」

(二) 修造(天平)期

ひとまず完成していた金堂を中心とする伽藍施設に加え、神亀・天平期に塔、講堂(礎石建ち、瓦葺)の建物が建てられた。塔は、当初の構想されていた位置に据えられた。区画扉は、金堂に中心線を置く位置に設置し直され、外郭施設も一新された。全体的に塔の造営を機に、伽藍施設が修造されたといえる。なお、この時期(聖武朝期)に伊賀国では各郡の郡司層も参画するかたちで、毛原廃寺の造営が行われ、これを機縁に各郡の寺が修造されていることも触れておきたい。

(三) 小修理(平安前期)期

各瓦葺建物跡から平安前期の軒瓦が出土している。従って、平安前期に小修理が広範に行われたと推定される。

(四) 夏見廃寺の造営時期についての山田猛氏結論

この三期にわたる造営事業を踏まえ、山田氏は、夏見廃寺の造営について、次のように結論付けている。

「夏見廃寺は、六八〇年代頃の白鳳期から創建され、神亀二年か、その直後からの天平期に大幅な修造が行われた。そして、平安時代前期には小修理が行われた」〔註 十一〕

八 夏見廃寺の焼亡

夏見廃寺は、十世紀(九〇〇年代)末ごろに焼亡したと思われる。その根拠となる事証は次の通りである。

①火災があったことについては、塔の発掘結果からも側柱北西角の礎石と床面が赤く焼けているなど、それを証する状況証拠が残されている。

②これから詳しく検討することとなる『薬師寺縁起』記文に、「夏身寺・本(もと)は伊賀国名張郡にあり」と、その存在が既に過去形での記載になっている。『薬師寺縁起』は長和四年(一〇一五)頃に書かれており、その時点で既に焼失し、なかったこととなる。

③十世紀頃から古代律令制は転換期を迎え、維持が難しくなり、変質していった。それとともに、これに依存する古代豪族も没落していった。夏見廃寺を氏寺としていたと推定する夏身氏にも、この変革の風は押し寄せたと思われる。既に見たように承平四年(九三四)の伊賀国夏見郷刀禰解案に刀禰として登場していた夏身氏は、康保二年(九六五)の伊賀国名張郡刀禰解案には夏見郷刀禰として伊賀氏が登場し、夏身氏は姿を消しているのである。その背景には夏身氏の没落も想定され、檀乙願主がいなくなり、夏見廃寺も、その維持がむずかしくなっていたと思われる。この時代は、夏見廃寺に限らず、同じ要因で多くの古代地方寺院が廃絶している。

これらを背景にして、夏見廃寺は九〇〇年代末頃に焼亡したと推定される。顧みれば、創建から三〇〇年、名張郡(夏見郷)の寺として崇められ、祈り・弔いの場を提供してきた夏

見魔寺は、その後再建されることなく、歴史から姿を消したのである。

〔註〕

〔註 一〕 八木充編集 『古代の地方史 二山陰・南海編』 朝倉書店 一九七七・九

〔註 二〕 名張市教育委員会 『夏見魔寺第三次発掘調査概要』 一九八七・三

〔註 三〕 三舟隆之 『古代氏族と地方寺院』 同成社 二〇二〇・六

〔註 四〕 吉村武彦・吉川真司・川尻秋生編 『古代寺院』 海野聡「寺院建築と古代社会」

岩波書店 二〇一九・一二

〔註 五〕 〔註 四〕に同じ 吉川真司「古代寺院への招待」

〔註 六〕 小笠原好彦 『日本古代寺院造営氏族の研究』 東京堂出版 二〇〇五・八

〔註 七〕 名張市教育委員会 『夏見魔寺第二次発掘調査概要』 一九八六・三

〔註 八〕 令和五年(二〇二三)一月二十八日(土曜日) 読売新聞

〔註 九〕 平成四年(一九九二)二月六日(木曜日) 中日新聞(西)

〔註 十〕 名張市教育委員会 『夏見魔寺第一次発掘調査概要』 一九八五・三

〔註 十一〕 夏見魔寺研究会・山田猛 『夏見魔寺の研究』 (有)青山文芸社 二〇〇二・九